研究紀要論文抄録

我が国における共通テスト・システムの構造(1)

－共通テスト志願から次年度再志願までの時系列的行動分析－

研究開発部試験作成支援研究部門　鈴木規夫
研究開発部試験環境研究部門　鳴野英彦
研究開発部試験作成支援研究部門　石岡恒憲

国公立大学入学志願者の共通テスト志願から次年度の再志願までの一連の流れを構成した受験モデルにより，受験行動について分析を行った。データは，昭和54年度から平成13年度までの20数年間に実施された共通テスト結果を利用した。はじめに，受験行動（共通テスト志願，個別試験出願，合否状況，および次年度における共通テスト再志願）の各段階における量的（人数）変化の特徴を時系列的に記述すると共に，量的変化をもたらした要因を共通テスト・システムの変更内容と関連付けて検討した。次いで，属性別にみた各段階における時系列データの特徴を記述した。ここでは，時系列の特徴を把握するための補助的手段として，各時系列データ間の関係を相関係数によって要約する方法を試みた。

分析の結果，以下の点を指摘できた。①共通テスト志願者数は平成２年度に私立大学が参加して以来，次第に増加しており，平成９年度には60万人を超えた。②共通テスト・システムの幾度かの変更にも拘らず，国公立大学への個別試験出願者数はほぼ30万人前後という一定の数で推移する安定した構造をもっていた。このように国公立大学への出願者数が安定した構造となっているのは，合格可能性を考慮した「自己選抜」が適度な調整機能として働いていることを推測させる。③昭和62年度における「受験機会複数化」による影響は，過去20数年間の中で最大であった。その影響は，共通テスト志願から合否状況にいたる全ての段階で見られた。④相関係数によって各段階間の関係を調べたところ，共通テスト志願者数の増減が，その後の段階の行動に大きく影響を及ぼすことが分かった。⑤属性（性別，卒見・既卒の別，学科別，課程別）によって，受験行動が異なっていることを確認できた。たとえば，性別でみると，女子は男子に比べ各段階間で強い共変動の関係にある。また，出身校についても，個別試験以降の各段階の行動は国立，公立，私立の設置者別に顕著な差が見られ，その特徴は過去23年間安定した構造となっている。たとえば，個別試験出願率は国立＞公立＞私立，合格率は国立＞公立＞私立，辞退率は私立＞公立＞国立，再志願率は国立＞私立＞公立，といった高低関係が成立している，等の特徴を指摘できる。